

い、ということである。正統派の英語教師（奇人であってもよい）が英語を通して生徒に人間的な影響をも与えるというドラマを、誰か英語教師歴のある脚本家、あるいは英文科出身で教職課程を取っていた脚本家が書いて、できれば英語や英語圏文化に造詣のある俳優が演じてはくれないだろうか。そもそも教師が偉そうに教師面をすることができるのは教科指導ができるからであって、生徒よりも人間的に優れているからでは決してない。だから私は、すべての教育活動は教科を通して行うべきである、と敢えて極論したい。体育以外の教科の先生には、運動部の指導なんかしている暇があったら自分の教科の勉強をしようよ、とも言いたい。もちろん、一人一人の教師を責めるつもりは毛頭なく、本当に言いたいのは学校の体勢をもっと教科中心にしましょう、ということである。現状では教師が本来なら勉強すべき時間に、部活指導ばかりでなくありとあらゆる雑務に追われていて、教科指導の基盤となる専攻分野をより深く学んで生徒にその面白さを伝えるということが出来るだけの余裕がなくなっている、ということが何よりも問題なのだ。教師が心おきなく自分の興味のある分野の勉強に専心出来るだけの時間と研究費を、本当なら学校や地方自治体、あるいは国が保障すべきなのである。そうでなければ授業は改善されないし、授業が改善されないということは学校が改善されないということであり、学校教育が改善されなければこの国に未来はない。こういう問題提起も含めて、授業で生徒と視聴者の双方を感動させられる英語教師の物語を、誰か心ある脚本家には是非書いて欲しい。視聴者にとってもドラマを見ながら英語の勉強ができるのだから一石二鳥ではないか。

フランス共和国大統領サルコジの挙げる偉人たち

法学部

田中 正人

昨（2007）年4～5月に実施されたフランス大統領選挙の途中経過については本誌17号にて紹介したが、結局、サルコジ Nicolas Sarkozy が大統領に当選した（詳しくは『法経論集』第175号掲載の拙稿を参照）。直後の下院総選挙で右翼（保守）が議会多数派を占めたことによって、2012年までの安定政権がフランスに成立した。

「メディア選挙」の様相色濃い選挙の後も、リッチなヴァカンス報道や再婚など話題に事欠くことはなかった。しかし、流産に終わりはしたが、欧州連合新条約締結に向けての欧州外交推進、憲法改正、F. ブローデルの描いた『地中海世界』の現代組織版たる地中海同盟の提唱・推進、そして近時の金融不安拡大の中での欧州レヴェルでの取りまとめやアメリカへの働きかけなど、精力的活動ぶりは一向に衰えを見せていない。

*

さて本稿では、大統領選挙戦が公式に始まる前、2007年1月14日に開催された人民運動連合UMP大会での大統領候補指名受諾演説（パリ政治研究院 IEP de Paris 卒、51歳のアンリ・ゲノ Henri Guaino がゴーストライター écrivain fantôme）を材料に彼の歴史観、政治姿勢を探ってみようと思う。

**

パリ第10大学の学生時代からUMPの前身共和国連合UDRの下部活動家であり、ついに大統領候補（そして大統領）にまで登りつめたサルコジは、まず大統領候補指名への謝辞の中で、バラデュール元首相、シラク前大統領らが「混血の私にフランスへの愛とフランス人であることの誇りを教えてくれた」と述べる。今日のフランスを築いてき

た人物として、ジャンヌ・ダルク、ガンベッタ、ジャン・ムーラン、ゾラ、ユゴー、クレマンソー、ボンピドゥーらの名を挙げ、サルコジ自身の思い描くフランス Ma France は、例えば聖ルイとカルノとの、パスカルとヴォルテールとの総合 *synthèse* であるとする。

その上で、共和主義的右翼 *droite républicaine* を自認するサルコジは、すべてのフランス人、極左と極右を含む両翼に、また無党派層にも「手を差し伸べる」と訴えた。1968年の5月革命後にボンピドゥー大統領が行った「新たなルネッサンスが必要」との発言を引き、フランスの未来に向けての飛翔のために、これまでの陣営、左翼・右翼の別を越えて、すべてのフランス人に「一緒にやればすべてが可能となる」というのであった。政権公約パンフレット『一緒にやればすべてが可能となる』では、過去25年来（すなわちミッテラン、シラク大統領期）の「宿命論、断念、あきらめ」の政治との断絶 *rupture* を強調した。

旧套墨守を排し、革新と創造とによって完璧な共和国（この *démocratie irréprochable* なる言葉は演説の中で14回反復）を目差すとし、立法府と執行府との関係の調整と統治する *gouverner* 大統領による民主政の更なる民主化を、ヴァーチャルな民主政 *démocratie virtuelle* から現実態としての民主政 *démocratie réelle* という表現で提起した。

さらに、「フランス人とは何か」という国民的アイデンティティ *identité nationale* との関連では、「私のフランス Ma France」は開放的で、人を快く迎える国民なのであって、人権の祖国フランスを愛し、フランス語を話せ、書け、共和国の価値体系と法とを尊重する移民・外国人は受け入れるとした。1970年代以降の、ペタン、ヴィシー期のフランスに対する厳しい評価については、「現在のまなざしで過去をあまりに厳しく判断してはならない」とする。旧悪を暴露・憎悪することによって、祖国を愛する子供たちは育たないというのであった。ここには、この日本での「自虐史観」批判と通底するものがある。

対米関係については、「諸国民の権利あるいは国際法を侵害するとき、一方的に決定するとき、世界をアメリカ化しようとするとき」には「正しくない」と言う友人であることをサルコジは確認する。イラク侵攻の際にアメリカがとった一極主

義 *unilatéralisme* への批判であり、この日本の外交姿勢と比較してみると、感慨深いものがある。

サルコジは、自分を政治の世界へ導いた人物として、元首相ジュベ、シラク、ドゴール、シャパン=デルマス、ベレッティ（レジスタンスに参加、44年にドゴール警備、国民議会議長、47年から没するまでヌイイ市長。後任にはサルコジ）、バラデュール（95年大統領選にシラクに盾突く形で立候補、その際、サルコジも支持）を挙げた。

今日のフランスを築いた人びととしては、マンデル（ジョルジュ。1940年に内相、対独抵抗運動を訴え、逮捕され、44年に親独義勇隊員=フランス人の手で銃殺）、ギ・モケ（レジスタンス運動のシンボル）、ジャンヌ・ダルク（「フランス救国の英雄」「オルレアンの少女」）、ガンベッタ（普仏戦争の最中に、熱気球でパリを脱出、ボルドーに援軍を要請）、ジャン・ムーラン（レジスタンス運動の統一に尽力、フランス人の密告により拘束され、44歳で拷問死）、フェリックス・エブエ（仏領ギヤナ生まれ、チャドの総督。1940年6月以来、ドゴールを支持して、レジスタンス運動に）、エミール・ゾラ、ヴィトル・ユゴー、ジョルジュ・クレマンソー（第一次大戦中に対独徹底抗戦体制を構築、仇名は「虎」）、シモーヌ・ヴェイユ（アウシュヴィッツ強制収容所の生き残り、厚相、欧州議会議長も務めた）、ピエール師（貧者や社会的に排除された人びとの救済活動に尽力）、元大統領ボンピドゥー、である。

その他、列聖されてサン・ルイと称されるルイ九世、フランス革命期のラザール・カルノ、パスカル（数学者、物理学者にして哲学者）、『百科全書』派の哲学者ヴォルテール、ブルボン王朝の開祖アンリ四世、ジャン・ジョレス（フランス社会党創設者のひとりで、第一次大戦勃発直前に暗殺）、レオン・ブルム（第一次大戦後、社会党を指導し、フランス人民戦線内閣の首相）、実存主義の哲学者アルベール・カミュ、ジュール・フェリー（第三共和政前期に公教育改革と植民地拡大に努力）、革命期のジョルジュ・ダントン、クロード・エリニャック（コルシカへの政府派遣委員（知事）でコルシカ独立派によって暗殺）、元大統領ジスカール・デスタンの名が挙げられている。

以上の人物群を分類してみると、総計30名のう

ち、革命以前の人物は4名、近・現代の人物が圧倒的多数。哲学者3名、文学者2名であって、政治家が断然多い。右翼（保守）に位置づけられる人物と並んで、左翼に属する人物も7名。レジスタンス運動に関わった人物は10名近く。ただし先に触れたように、その敵であったヴィシー政府関係者、対独協力者に関わる「暗黒」史の断罪には消極的である。

日本の政治家の演説、例えば所信表明演説には格調と説得力が備わっているであろうか。日本の政治家にとって誰が偉人なのであるか。小泉元首相については長岡藩士小林虎三郎、安倍元首相については吉田松陰の名を挙げうる。福田前首相にとっては、また麻生首相にとっては誰が？さらに、私を含め、日本人にとって「偉人」として誰の名を挙げうるのだろうか。ここには、日本人が辿ってきた歴史そのもの、歴史叙述のあり方、さらには歴史教育が大きな問題を抱えていることが垣間見られるように思えてならない。

就任後1年半近く。サルコジ人気には翳りがみられるものの、過去20数年間の政治を旧套墨守とし、それとの断絶を前面に押し出すスタイルには、ブッシュ（イラク侵攻を「十字軍」に譬え）や小泉（郵政改革、刺客）やフランス極右「国民戦線」の党首ルペン（すべての悪の根源は移民にある、とするディスクール）には及ばないが、扇情の大衆動員、大衆迎合主義とでも訳すべきポピュリズム populisme の側面がある。また、半大統領制（あるいは二元的議院内閣制）という枠組みをもつフランスにおいて、大統領権限の拡大や自律化を志向し、憲法改正を成し遂げた。ここには、「大統領化 presidentialisation」と呼びうる現象が存在する。以上2点については、今後、機会を改めて論じてみたい。（2008年11月2日脱稿）

ミュージカルへのお誘い 『オペラ座の怪人』編

経営学部

太田 幸治

今回もミュージカルへの誘い

筆者が書いた前回の『語研ニュース』の記事への反響が少なからずあった。反響の中に、「太田がミュージカルが好きだというのが意外だった」というものが複数あった。筆者がミュージカル好きなことは、そんなに意外なことなのか。筆者は常日頃、優雅に立ち振る舞っていると思っていたのだが。と、カミさんに家で話をしたところ、「いつも汚い服装に、リュックサックを背負って猫背で歩いているお前さんを見て、ミュージカルの優雅さを連想する人はいない。」と言われ、「ほお、そういうものなのか。」と複雑な感想を持ったものである。

今回は私が書く話としては、意外性のない話にしてみたいと思う。

今回のテーマは、ラブ・ストーリー。

といっても、今回もまたミュージカルの話。

ロンドンの『オペラ座の怪人 (The Phantom of the Opera)』について書く。

『オペラ座の怪人』は、もともとは、フランスの作家、ガストン・ルルーが書いたホラー小説である。しかし、ミュージカル版の『オペラ座の怪人』は、ホラーではなく、甘くそして切ないラブ・ストーリーに仕上がっている。

今回とりあげるミュージカル版『オペラ座の怪人』は、1986年にロンドンで生まれたミュージカル。1986年にロンドンの Her Majesty's Theatre で開幕して以来、同じ劇場で2008年の今日まで約22年もの間上演され続けている。また日本では1988年から劇団四季が翻訳版を上演している。

筆者にとって、この作品の魅力は3つ。まず、巨大なシャンデリアをはじめとする当時のオペラ